

すぽっとライト


NO. 36

四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

今回は、全国の障がい者・高齢者の方々に新居浜市を拠点とした四国地域全般のバリアフリー情報を発信され、障がい者等に合った旅行を案内されるほか、[※]パーソナルバリアフリー基準に基づき、障がい者自らがメンバーとなって観光宿泊施設を調査指導されている愛媛県新居浜市の特定非営利活動法人「四国バリアフリーツアーセンター」理事長の白石誠一郎さんにお話を伺いました。

白石さんは、現在 NPO 法人「サスケ工房」西条事業所（就労継続支援A型事業所）でIT業務に従事されています。職場にお邪魔して、事業所の方々にもお話をお伺いすることが出来ました。

※) パーソナルバリアフリー基準：身体に障がいのある人や、高齢によって身体が不自由な人をはじめとする、さまざまなみなさんに旅行を楽しんでいただけるように開発した基準

 **四国バリアフリーツアーセンター設立の目的のほか、設立のきっかけなどについてお聞かせください。**

現在の日本バリアフリー観光推進機構理事長である中村元さんが、全国に先駆けて「伊勢志摩バリアフリーツアーセンター」を立ち上げ、様々な障がい者や高齢者に合わせた「パーソナルバリアフリー基準」を構築されましたが、限られた1つの地域だけでなく全国統一規格でバリアフリー観光を提供するためのネットワークづくりと、そのための組織が必要とされていました。当時、それらの地域組織が次々と設立された時期でもありましたが、私自身が車いすツインバスケットボールを引退した時期でもあり、地元の白石徹さん（現衆議院議員・四国バリアフリーツアーセンター理事）からの薦めもあって設立したのがきっかけです。



白石誠一郎さん

普段はどのような活動をされていますか。

新居浜市、西条市のほか大きな交通機関として松山空港はじめJRの各駅などを回って調査するのがメインとなっています。今後の目標は四国全域の調査を完了することです。

現在までの調査では、地元の新居浜南高校のユネスコ部の生徒さんたちの協力のもとで新居浜市の観光施設を中心に駐車場、トイレなどの障害者用設備の整備状況、段差の有無などの確認、スロープの傾斜、建物の入口幅などを実測したりして、障がい者や高齢者の方々が自分で行ける観光地かどうか判断出来る情報を提供しています。

新居浜南高校ユネスコ部は、別子銅山のガイドなどの活動をされていて、高校生の観光甲子園で全国の準グランプリになったこともあります。それをツアーにしようということで毎年、別子銅山から産業遺産を巡るツアーをされていることから、その中に障がい者や高齢者のための情報も入れられないかという相談をしたところ、ご協力頂けることになったというのが経緯です。今ではそのツアー以外でのバリアフリー調査にも関心を持ってくださり、本来の活動に支障を来さないようにということで、2月に1～2回程度協力頂いています。

また、高校生に調査をお願いする際には、障がい者や高齢者のこと自体が分からないと困りますし、調査する理由などについて口頭だけの説明ではきちんと理解してもらえないということもありましたので、当事者が説明する「車いす・高齢者・視覚障害者疑似体験講習」を実施しました。その後新たなメンバーが加わる際にも調査の前に疑似体験講習を実施させて頂いています。

その他、障がい者や高齢者などの旅行に関する問い合わせがあった場合の相談業務では、県外のことであっても分かる範囲で調べて答えさせて頂いたり、他の地区のバリアフリーツアーセンターを紹介させて頂いたりしています。


また、調査の一環として加藤さんにも紹介してもらったりして新居浜市の街づくり活動で新たに設置された施設等の調査もさせて頂いていまして、新居浜市に大島という離島がありますが、その船着場の待合所に新しく公衆用トイレが設置されるということで、別の活動で大島に行く際にバリアフリー調査もさせて頂きました。紹介頂いたイベント等についても実際に参加したりして、おもしろい観光施設などは相談者にもご紹介させて頂いたりもしています。

^{*} (加藤さん)

愛媛県観光集客力向上支援事業の中で、みなさんの交流の場をつくろうという支援事業のフォローアップをお願いしたりしています。「瀬戸内海賊物語」のロケ地（村上邸本家「新居大島」）の見学ツアーのことも含めていろんな情報を提供させて頂いています。

※) 加藤さん：NPO 法人サスケ工房西条事業所 生活支援員 加藤 徹、新居浜市の協働提案事業「元気プロジェクト」代表として、地元のアートや文化の発信、イベントの企画・広報・集客支援を行うなど地域と共に元気なまちづくり活動をされているほか、国際交流、文化交流や海

外インバウンド事業に参加されるなど幅広い活動をされています。

 **四国バリアフリーツアーセンターで作成されたパンフレットや冊子等がございましたら教えて頂けますか。**

日本バリアフリー観光推進機構が発行している冊子「旅バリ」に掲載していますので、ご覧ください。その他、ホームページは最近更新出来てないのですが、フェイスブックに最新情報を更新している状況です。




また、時代にあった情報発信ということで、新居浜ケーブルテレビ（ハートネット）のデータ放送と連動させたスマートフォン（多機能携帯電話）での新居浜市の無料公式アプリ「新居浜いんふお」にバリアフリー情報の提供をさせて頂いています。そういったところに協力させて頂くことによって、独自に持っている情報をうまく活用出来ますし、バリアフリーツアーセンターの全国ネットワークと合わせて他にはない付加価値を提供しているということです。




(加藤さん)

メディアなどが入ると情報を入手出来る機会が増えますし、携帯で検索出来れば利用者の方々にもとても便利だと思います。

 四国バリアフリーツアーセンターが行っている調査の目的や特徴などについてお聞かせください。

日本バリアフリー観光推進機構では、全国各地に同じ規格でバリアフリー観光を提供するため、全国のそれぞれの相談センターがバリアフリー調査した情報を報告して「バリアフリー旅行サイト」を運営する仕組みをつくっています。四国バリアフリーツアーセンターでも相談センターとして情報収集と調査を実施して報告しています。また、「旅のカルテシステム」といって、全国のバリアフリーツアーセンターのどこかを利用された障がい者や高齢者の方々が旅行された時の細かな情報を「旅のカルテ」として保管して、お客さまの要望によって全国の相談センターでカルテを共有し、利用者の方々に誤った情報がいかないようにしています。

一般の調査ですと改善点等の指導も併せて行うということだと思いますが、私どもの四国バリアフリーツアーセンターの考え方は、バリアというのは障がいの部位や程度によって個々に異なるもので、例えば車いすの方と片足の方ではバリアそのものが違ってきます。なので、バリアの情報そのものを調査してその情報を公開するということです。その情報がバリアなのかバリアでないのかについては、相談に来られた方が決める事だと考えています。1～2cmの段差からちょっとした^{つまづ}躓きが起きるような地面の状態まで詳細にチェックするような調査を実施しています。これは「パーソナルバリアフリー基準」に基づいたものでもあります。

 H26. 6. 27に開催された「バリアフリー観光を推進する全国フォーラム 旭川大会」に参加されたそうですが、その時の感想やこれからの取り組みについて何か考えておられることがございましたらお聞かせください。また、道中での交通機関利用に関して感じたことがございましたら教えてください。

この大会は日本バリアフリー観光推進機構という全国組織が実施しているのですが、全国各地に同じ規格でバリアフリー観光を提供するための相談センターができることを目指しています。全国の中でも規模は本当に小さいのですが、四国バリアフリーツアーセンターもその1つということです。

大会翌日のエクスカージョンで旭山動物園に行きましたが、スキーのジャンプ台のような坂道もあり、バリアが典型的なところでした。ただ、バリアがあるから行けないのではなく、それに対して園長さんもお理解がありますし、地元の方々が案内ボランティアのグループをつくって積極的に中に入って介助してくださったり、コースを自分たちでつくって案内してくださったりで、全くバリアにはならないんです。むしろそのこと自体が良い思い出や印象に残ったりして、その方々と会話するきっかけにもなりました。バリアを物理的に直すだけでなく、誰かが手助けする仕組みをつくるといった発想があっても良いの

だと考えるきっかけにもなりました。

道中は、松山空港までは車で行きました。空港の身障者用駐車場は多くあるのですが、混雑時には健常者の方が平気で駐車されることもあって駐車場を利用出来ないことがあります。そのへんが心配ですので送迎を頼んだりタクシーを利用する方が多くなっていると思いますので、空港でのチェックをもう少し厳しくしてほしいと感じています。

飛行機に乗る時は、車いすの方は車いす自体が積込荷物になるということで、機内通路の幅以内の車いすであっても飛行機用の車いすに乗換えなければなりません。自分の車いすだと自由に移動出来る方でも飛行機用車いすに乗換えると介助されなければ行きたいところに自由に移動出来ません。飛行機に搭乗するまでの待ち時間が長くなるとトイレも大変ですし、今回のように乗換（新千歳～羽田～松山）があると、飛行場に着けば職員もいなくなりますので、お土産を買うことも出来ません。自分の車いすで飛行機に乗り込めれば良いのですが、飛行機のつくりがそうになってないのかもしれないし、アテンダントさんの邪魔になるのかもしれない。

また、乗換えのある便で旅をすると自分の車いすが壊れて出てくることが多くあります。自分の足である車いすですから、そうならないように管理を徹底してほしいと思っています。


新千歳空港から会場へは、同行者もいましたのでレンタカーで行きました。なので、公共交通機関を利用したのは、飛行機のみです。

今年の2月にモニタリングツアーということで、新居浜から松江までJRを利用して行きましたが、車いす対応の便が制限されていたり、障がいの状態によっては車いすスペースに乗車出来ないこともありますし、乗換時にトイレが利用出来ないとか、管轄が変わる時の駅員さんの伝達がうまく出来ていなかったりとかで、まだまだ不便さは多かったように感じました。

（加藤さん）

「サスケ工房」にも松山や県外から障がい者の方が見学に来られることがよくあります。JRを利用して西条まで来られますが、駅員さんがよく対応してくださっていて、やはり不便なところは人の手でということが大切なのかなと思いますし、昔に比べると駅員さんの対応もかなり改善されてきているとは感じます。管轄の違うところでの伝達についても研修などで今後改善して頂けるのではと期待しています。いろいろ問題点は多いと思いますが、障がい者の方々が中心になっての生の声が大切で、それをいろんな分野に働きかけて改善していき、そしてイベントなどで案内させて頂いて、それらの蓄積によって旅行代理店さんとのツアーを組むことが出来ればというところですね。

バリアフリーに対して先進的な取り組みをされている三重県ではバリアフリー宣言をして県をあげて取り組んでおられ、地域によってもかなり差が出て来ているのも事実です。四国では「四国霊場開創1200年」でお遍路への注目もされていますので、バリアフリー観光も積極的に考えていく時期なのではないかと思います。

 全国の障がい者や高齢者の方々に合った旅行を案内されているという内容が「全国バリアフリー旅行情報」に掲載されていますが、新居浜市のほか四国内でお勧めの観光施設や宿泊施設についてお聞かせください。

宿泊施設では愛媛県だと「道後 友輪荘」がいいかなと思います。閉館時間が少し早いのですが、車いすの方でも入れるお風呂があり、道後観光にも行きやすく松山からのアクセスも良いので、愛媛県では障がい者にとってメジャーな宿泊施設となっています。高知県では「はりまやばし」近くにある高知会館がバリアフリー全対応だったかと思います。JRを使われる方は駅と一体化しているホテルクレメントが便利で宇和島、徳島や高松も近かったと思います。

観光地に関しては、障がいの状態にもよりますし、それぞれの好みもありますので、何とも言えません。宿泊施設でも同じだと思いますが・・・。

(加藤さん)

施設の職員の対応一つでも変わると思います。



生活支援員の加藤 徹さん(左)

インタビューを終えて

障がい者等の自立と社会参加の要請や観光振興の重要性が高まる中で、四国では全国に比べ高齢化も急速に進んでいます。高齢者や障がい者等が公共交通機関を使った移動をしやすくするためのバリアフリー化はより一層求められています。2017年には愛媛県で全国障害者スポーツ大会の開催、2020年には東京パラリンピックが開催され、各地での心のバリアフリーも含めた受入体制整備が求められています。

障がい者の目線から旅の案内、バリアフリー調査、心のバリアフリーのための意識の醸成活動、街づくりへの参画など多岐にわたって活躍しておられる白石さんや四国バリアフリーツアースターの皆様、それをサポートされている加藤さんをはじめサスケ工房西条事業所の皆様など、多くの方々の絆によってバリアフリー化に向けた取り組みが継続して進められているのだと感じました。

四国には「お接待の心」があります。ハード面のバリアフリー化も必要ですが、バリアをバリアでなくする人の関わりの大切さ、すなわち心のバリアフリーの醸成も大変重要なものだということを強く感じさせられるインタビューとなりました。

インタビュー実施日：平成26年7月4日（金）・聞き手：秋山、北地